

文・写真——小杉圭子  
写真提供——Koichiro Kitashita / Mariko Tagashira

# 声と手がひとつ しゅか 合唱と手歌が 地球をつなぐ

巨匠と天才奏者とアマチュア音楽家。聞こえる人と聞こえない人。日本人とベネズエラ人。園児から社会人まで、地球上の多様な人々が東京芸術劇場に集い、できることをもち寄って一つの歌を歌いました。障がいも言語も国境も乗り越える、音楽のエネルギーをお伝えします。

つ  
に



©FESJ/2017/Mariko Tagashira

## ガラ・コンサート《エル・システマ・フェスティバル2017》

10月22日 東京芸術劇場コンサートホール（東京都豊島区）

主催 駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館、東京芸術劇場、（公財）東京都歴史文化財団、（一社）エル・システマジャパン、豊島区



## エル・システマ、 多様性と共生

東京池袋の東京芸術劇場、通称「芸術劇」での「エル・システマ・フェスティバル」は4回目を迎えた。南米ベネズエラ発祥の社会教育プログラム「エル・システマ」出身の若き芸術家を東京に招く。2017年は、17歳でベルリンフィルに入団した天才コントラバス奏者エディクソン・ルイスが来日。室内楽演奏会を開き、若手奏者を育成した。ガラコンサートは、国際社会での多

様性や共生を感じさせる3部構成だ。エル・システマに共感する人々が国内外から集った。第1部は福島県相馬市の小中高生による合唱団「相馬子どもコーラス」。第2部は視覚障がい者を含むベネズエラの歌唱グループ「ラ・ソモス」。第3部では、子どもたちの指導にも関わる学生と社会人のオーケストラを井上道義さんが指揮した。

第1部の幕開けは「相馬盆歌」。この民謡が謡い継がれる福島県相馬市を、あの日、東日本大震災が襲った。翌2012年5月、相馬市教育委員会とエル・システマジャパンは協定を結ぶ。子どもが家庭状況を問われずに参加できる音楽教室が生まれた。まも

なく古橋富士雄さんが着任。NHK東京児童合唱団を育て上げ、日本の合唱界を牽引する指揮者が、温かくユーモアあふれる指導を続けてきた。

活動開始から5年半。「相馬子どもコーラス」はどんな共演者とも舞台をつくり上げる合唱団に育った。常盤道をバスで4時間半かけて東京へ。初対面のベネズエラ人や、ろう学校の子どもとゲームに興じ、おやつのあるパンを頬張ってリハール。3時間半の本番もへっちゃらだ。安定した歌唱力には定評がある。

メンバーが毎年入れ替わる学生合唱団の歌唱力を安定させるのは簡単ではない。秘訣は「関係性を育てること」と古橋さんは話す。練習では、経験の長い子どもが、新入りの子どもの脇に立ち、楽譜を指で追ってやる姿が見られ始めた。エル・システマの提唱する学び合いの考え方が、5年を経て子どもたちに根付きつつある。

## ろう者は毎日が 多言語・異文化

第1部の中盤、相馬子どもコーラスの子どもたちに迎えられ、白い手袋の11名がはつらつと舞台上に歩み出た。



手歌で合唱と日本初共演する「東京ホワイイトハンドコーラス」だ。メンバーは、園児から高校3年生。ろう者（聴覚障がい者）10名とその家族である。声ではなく手で意思疎通ができる。手で冗談も飛ばす。

唱歌『もみじ』（高野辰之作詞／岡野貞一作曲）が始まると、白い手が次々と開いて、宙を舞った。まっすぐ立ち、指や手首、肘、腕、肩、首、視線など上半身を機敏に動かす。両手を重ねたり接したり離したり、緩急をつけながら、歌詞のイメージを多彩な動きで表現した。

ある小学2年生は、モーツァルト作曲『アヴェ・ヴェルム・コルプス』の一節に、犠牲の痛みを伴う崇高な魂を追い求める表情で天を仰いだ。情感と力に満ちたまなざしは、かの名旋律を思い起こさせた。

ホワイイトハンドコーラスは、ベネズエラでは1995年に創設、2013年のザルツブルグ音楽祭に出演した実績をもつ。日本では2017年6月に始動。都内のろう学校への呼びかけに応じ、子どもたちが芸術に集った。練習は月2回。特長は、ろう者自身が主体的に、自由な着想でつくった手の動きを、ろう者俳優の井崎哲也さんが演劇の技法を用いて構成した。井崎さんは「類いまれな表現力は、ろう者の日常と練習の両方に由来する」と言う。「ろう者は、境遇の異なる相手に応じて、サインや手話、口話を使い分けて伝えます。生まれたときから、家庭や学校が多言語・異文化環境そのものなのです。これに加え、舞台で観衆に伝える表現を練習しました」。

練習では、音楽家のコロンネリかさんが手歌を指揮し、子どもたちの気持ちを引き出した。「ろう者の子どもたちが、音楽という未知の世界の扉をたたき、舞台上飛び込んだ勇氣に感謝しています。音が聞こえないならわからないだろう、という多くの人の先人観を取り払い、音楽とは何かを問いかけられました」。

### 違いや限界を認め合う、自由な社会をつくらう

アンコールの『平原の魂』（グティエレス作詞・作曲）では、70歳の巨匠井上道義さんが躍動した。指揮をしながらその場で手歌を演じ、出演者全員を束ねていく。井上さんは音楽を社会になぞらえる。「楽器は一つでは限られた音域しか出ない。ある楽器は大き

い音が出ないし、ある楽器は速い音形ができない。オーケストラとは、自分と違う能力をもっている人の間で、何かをつくり上げる勉強なんです。自由な社会とは、違いや限界や不自由さを、隠さずにオープンでいられる社会。エル・システマはそういう運動をしています。僕が協力するのは当然だと思っています。僕自身は、求める音の形を手で表そうと、50年ずっと指揮を続けています。ホワイイトハンドコーラスとどこかで通じるかもしれないね」。

東京芸術劇場では、広く門戸を開いた芸術教育を続けていく考えだ。手歌の活動も継続していく。ひととき鮮烈な存在感をもたらす新しい合唱の形に今後も注目したい。



①アンコールでの一幕 ©FESJ/2017/Koichiro Kitashita  
 ②相馬子どもコーラスと古橋富士雄さん。震災から5年。当時の小学生は今や高校生だ ③多言語異文化交流では文脈から意味をつかむ。ろう者は、他言語圏の人とおおよそのコミュニケーションが取れるという ④手話で考えを伝えてくれた。「相馬の人の声と私たちの手が、一つの歌になった。舞台では、日本人もベネズエラ人も、聞こえる人も聞こえない人も、音楽で仲良くなったことを周囲に伝えていきたい（小学3年生）」「練習で楽器にふれて響きを感じるとき、喜びがありました。特にコントラバスは響きもリズムもダイナミックなんです（高校3年生）」 ©FESJ/2017/Mariko Tagashira ⑤手歌指導陣。井崎哲也さん（右から二人目）は「音楽教育では音の獲得が聴覚に依存しがちで、目に見え、手で触れ、身体で感じる形に置き換える工夫が、長らくされにくかったのではないかと指摘する。音楽を「見える化」する手歌の可能性も見出せそうだ ©Keiko Kosugi